

217 妊娠中期に自然消失した胎児 Nuchal translucency例についての予後に関する検討

山梨医大

深田幸仁, 滝澤 基, 安水洗彦, 加藤順三

〔目的〕胎児の Nuchal translucency (以下NT) は頸部の異常な液体貯留エコーと考えられ、染色体異常を高頻度に合併することが知られている。しかし、NT例には妊娠中期に自然消失するものもあり、消失例と存続例の児の予後の差異はよく知られておらず、かつ本邦での消失例の予後に関する報告例はない。そこでNT消失例と存続例の予後の比較を試みた。

〔方法〕NTの厚さ5mm以上を異常と定義した診断基準に基づき、過去2年間に当科で管理したNT例9例を対象とした。このうち、妊娠24週までに自然消失をみた4例をA群、自然消失しなかった5例をB群として比較・検討した。

〔成績〕(1) 9症例はいずれも妊娠10週から15週の間診断され、平均診断週数はA群 12.0 ± 1.6 週、B群は 13.8 ± 1.5 週で有意な差はなかった。(2) 診断時のNT径の平均値はA群 5.63 ± 1.08 mm、B群 11.20 ± 2.13 mmと有意な差が認められた。(3) B群5例中3例は、その後に頸部リンパ嚢腫・胎児水腫へと進展した。(4) A群はNTの重要性が十分に認識されていなかった時期の症例もあり、全例が妊娠を継続し2例は分娩後21 trisomyと判明した。他の2例は羊水染色体検査は正常であったが、1例は四肢短縮症であった。(5) B群4例に羊水染色体検査を施行し3例が45XO、1例は正常であったが、腹壁破裂・合指症など多発奇形を合併していた。(6) B群は本人および家族の希望により全例が中期中絶となった。

〔結論〕自然消失した4例中 intact survivalは1例しかなく、また2例に21 trisomyを認めたことから、自然消失の有無にかかわらずNT陽性例は予後不良と考えられる。

218 胎児輸血が著効したヒトパルボウイルスB19感染症の一例：特に胎児ヘモグロビン濃度と sinusoidal fetal heart rate patternとの関連

静岡県・聖隷浜松病院、聖隷三方原病院*、クリストファー看護大学**

村越 毅、安達 博、成瀬 寛夫、宇津 正二*、鳥居 裕一、前田 一雄**

〔緒言〕ヒトパルボウイルスB19 (以下B19) は胎児に重症貧血・胎児水腫を惹き起こすことが報告されている。また、胎児貧血の胎児心拍数図において sinusoidal fetal heart rate pattern (以下sFHR) が出現することも良く知られている。我々は、B19感染による妊娠27週の胎児貧血例に対して4回の胎児輸血を行った過程において、胎児Hb濃度とsFHRの出現頻度に対して若干の知見を得たので報告する。〔症例〕32才、2経産。妊娠15週頃に二人の子供が伝染性紅斑に罹患した。27週に胎児腹水及び心拡大を認めB19による胎内感染を疑い入院となる。27週4日の胎児採血で、Hb 1.8g/dl、Ht5.5%と著明な貧血を認め、胎児血でのB19 IgG, IgM, DNAはいずれも陽性であった。27週5日から29週5日にかけて計4回の胎児輸血(臍帯静脈及び、胎児腹腔内)を施行した。これにより胎児Hbは $1.8 \rightarrow 3.0 \rightarrow 4.3 \rightarrow 6.1 \rightarrow 10.0$ g/dlと著明な改善を示し、36週2日、男児 2094g (Apgar8/9、Hb12.7g/dl、Ht39.0%)で経膈分娩となった。連日施行した連続胎児心拍モニタリングにおいて、観察時間当たりに見られたsFHRの出現頻度を胎児Hb濃度と比較した場合、2回目の胎児輸血以前(Hb1.8-3.0g/dl)は、sFHRの出現頻度は10%未満であるが、2回目の輸血後から、徐々にsFHRの出現頻度が上昇し(50-80%)、3回目の輸血直前(Hb4.3g/dl)には、観察中ほぼ全期間(90%)にわたりsFHRを認めた。しかし、3回目の輸血によりHb6.1g/dlと上昇するとsFHRは認められなくなり、accelerationも出現するようになった。〔結論〕胎児心拍数図において胎児貧血ではsFHRが特徴的な所見であるが、貧血の重症化に伴い胎児Hb濃度が一定の値以下になるとsFHRが認められなくなった。